

2025.12.23 改

「ブロードウェイの天使たち」銃と林檎のキャロル」



【無断転載複製転用を禁じます】

【あらすじ】

禁酒法令が解かれた一八三〇年初頭のニューヨーク。

二枚目デイヴはギャンブルや酒の密売の成功でブロードウェイを縄張りとするギャンブルのボスになっていた。彼は自分の身体に風穴が開くこともなく、警察の手入れを逃れてこられたのは、足の不自由なナタリーから買う幸運を呼ぶ林檎のおかげだと信じていた。

才気と美貌をもつ彼の妻ビリーは彼のキャバレーを経営していた。ある日シカゴのギャンブルのアルが乗り込んでくるが、デイヴは林檎のお陰で賭けに勝つ。次の取引で林檎が必要になり、ベツガー仲間の案内でナタリーのアパートに行くと彼女は絶望し酔いつぶれていた。なぜならスペインにいる一人娘のクララが、ロメロ伯爵の息子カルロスと結婚することになり、伯爵らと一緒に自分に会いにア

メリカに来るといふ手紙をもらったからだ。ナタリーは娘に、自分は再婚しミセス・マンデルとなり、高級ホテル『カールトン』に住んでいると偽って手紙を送っていた。デイヴとビリーは一芝居うってナタリーを助けようと決心する。デイヴに恩義を感じているロドニーはホテル『カールトン』の最上階の部屋に住んでいた。そこを借り、イボンヌや踊り子らの助けてナタリーは磨き上げられて貴婦人になり、ブレイク判事という詐欺師のヘンリーが再婚相手の役をやることになり、すべてうまく運ばれそうだった。ところがカルロスが、母となる足の悪いナタリーのために、帰国する前にニューヨークで結婚式を挙げようと話す。断る理由もなく神父とニューヨークの名士を呼ばなければならなくなったデイヴたちは、急遽子分と踊り子を仮装させ、紳士淑女になる教育をする。

ロメロ伯爵の訪米を知った新聞記者ライトマンは滞在しているホテルを突き止める。伯爵がミセス・マンベルの部屋にいるも、その名が紳士名鑑に無いことやデイヴたちが関わっていることを不審に思い、警察署長に話す。警察署長はデイヴに出頭を要請し、ギャング達の紳士淑女ごっこは中断してしまう。そこにあのシカゴのボス「アル」があらわれる。

挙式の時間になり、デイヴが現れないので伯爵らは不審顔だった。ナタリーが真実を打ち明けようと決心したとき奇跡が起きた。ニューヨーク市長を先頭に名士たちが現れたのである。その中には警察署長の姿もあった。

帰国の日、船着き場でクララ達とお別れをしている姿に涙するベッガー達。船に乗ろうとしたクララはマリアが手話で話をしているのを見て、すべてを理解する。

クララは母のためにも幸せになると心に誓う。

船を見送り波止場に残された皆は、以前と変わらない生活に戻るが、甘酸っぱくてみずみずしい、この奇跡の一週間のことを忘れないだろう。

林檎のように赤く美しい夕日が海に落ちてゆく。

原作 D・ラニアン「マダム・ラ・ギンプ」

原案 F・キャプラ監督「ポケット一杯の幸福」

制作 セゾンミュージカルコーラスカンパニー

脚本、監督 亀井千秋

音楽 カーペンターズ（日本語歌詞 亀井千秋）

ピアノ 濱口玲子

パーカッション 鈴木賢治

楽器演奏

【登場人物】

デイヴ  
ナタリー（ナタリア）  
ヘンリー判事  
ビリー  
イボンヌ  
クララ  
カルロス  
ロメロ伯爵  
ハンク  
リトルジョー  
ブッチ  
ジョジョ  
ブラックとレッド  
エド

---

（二枚目デイヴ）ブロードウェイのギャングのボス  
スペイン出身で元歌手だが事故で足が不自由になり、林檎売りとなる  
ヘンリー・ブレイク 判事というニックネームの詐欺師  
デイヴの内縁の妻でキャバレーのオーナー（ミス）・ビリー・ペリー  
ビリーの店の踊り子のリーダー（ミス・ルイジアナ）  
ナタリーの娘 幼少時からスペインに預けられ育つ カルロスと恋に落ちる  
ロメロ伯爵の息子 クララと結婚を誓う 英語はあまり話せない  
カルロスの父（アルフォンソ）スペインの伯爵 クララの家族に会いにくる  
デイヴの子分（女房役）↓クラーク・ゲイブル  
デイヴの子分（子供の頃からデイヴに世話になっている）↓日本大使  
デイヴの子分（のん気）↓マサチューセッツ州知事  
デイヴの子分（運転手）  
デイヴの子分 ブラック↓チャンドラ、レッド↓フリードマン町内会長  
デイヴの子分（変な笑い方をする 何を考えているかわからない）

アル（アルバート）  
B & B  
オスカー  
スマイリー  
ヤマダ（日系人）  
ミスター・ポストマン  
ロドニー  
アンダーソン神父  
ライトマン  
警察署長  
警察署長夫人  
ニューヨーク市長  
ニューヨーク市長夫人  
ピエール  
マックスと仲間

---

シカゴのギャングのボス（アル・カポネラ）  
ブルース兄弟 クレイジーなアルの子分  
ホテル・カールトンの客室係  
ホテル・カールトンの支配人  
ホテル・カールトンの受付係  
ホテル・カールトンの郵便係  
ホテル「カールトン」最上階に住む金持ち デイヴに恩義がある  
失業中の神父 ヘンリーの飲み友  
ニューヨークデイリー新聞の記者  
トラウトマン（酒好き）デイヴとつながりがある  
ミセス・トラウトマン  
ジニー・ウォーカー 暗黒街とつながりがあり「ジヨニ黒」と呼ばれている  
ジャネット・ウォーカー イボンヌの大ファン。  
ゲイのファッションコーデイネーター クラブ『レモンハート』オーナー  
アームレスリングの挑戦者 アメリカ南部からやってきた男たち

ララ  
リリ  
ルル  
ロロ  
チャコ  
ルツカ  
ピンキー  
オリヴァ  
マリア  
ノア  
インディ  
ミッシィ  
マリオン  
マミー  
ロック

ビリーの店のベテラン踊り子

踊り子 イボンヌの従妹

踊り子 ↓ロックフェラー夫人

踊り子 ↓日本大使夫人

新人の踊り子 ↓マサチューセッツ州知事夫人

ヘア・コーディネーター

メイキャップ・コーディネーター

ベッガー（男）（戦争で足が不自由）ベッガーのリーダー的存在

ベッガー（女）（聾啞）造花を作って売る。優しく強い心を持つ

ベッガー（男）（盲目）仙人のような風貌

ベッガー（女）（麻痺がある）空気を読まないが明るい性格

ベッガー（女）（顔に痣）手話ができる 思いやりと勇気がある

孤児 男の子のようだが実は女の子 デイヴに可愛がられている

ベビーカーをひいた母親 ナタリーの様子に悲しい過去を察する

デイヴの子分（ホストクラブ・ダンディーズを任されている）

メアリー

フレデリック

警備員（ティモシー）

客室係（バンブ）

ルビー

クロエ

---

アイスハート夫人 裕福な未亡人で貧乏人を見下している

メアリーの一人息子

ホテル・カールトンの警備員

オスカアの盗みを目撃してスマイリーに報告する

華やかで魅力的なキャバレーの従業員（ホテルの従業員兼任）

知的でアクティブなキャバレーの従業員（ホテルの従業員兼任）

シーンリスト

日曜日	シーン1	ブロードウェイ 街中
	シーン2	キャバレー（ビリーの店）
月曜日	シーン3	ホテルの裏口
	シーン4	ナタリーの部屋
火曜日	シーン5	キャバレー
水曜日	シーン6	セントラルパーク
木曜日	シーン7	ホテルのロビー
	シーン8	デイヴの部屋
	シーン9	ナタリーの部屋
	シーン10	ペントハウス
	シーン11	安酒場
	シーン12	ペントハウス

金曜日	シーン13	波止場
	シーン14	ペントハウス
土曜日	シーン15	ホテルのロビー
	シーン16	警察署
	シーン17	キャバレー
	シーン18	ペントハウス
	シーン19	ペントハウス
日曜日	シーン20	波止場
		カーテンコール

♪ジングルベル

♪ミスターグーダー

日曜日 (シーシー) 12月17日 夕方

クリスマスが近いブロードウェイの街

ベツガー(物乞い)の前や後ろを足早に通り過ぎてい人々

アイスハート夫人と息子がベツガーの前を通る

フレデリック、マリアの前で足を止める

マリア、スマイレの花を差し出す

メアリー「どうしたの、行きましょう」

フレデリック歩き出すが、マリアを振り返りミッシーにぶつかる

ミッシー「どこ見て歩いてんだよ! ああ、石鹸が泥だらけになっちゃった。

今日の稼ぎがパーじゃないか!」

フレデリックは母親に救いを求めるように見る

メアリー「それはお気の毒に」

ミッシー「同情するなら金をくれ」(夫人に近づく)

メアリー「あっちにお行き、しっしっ。さあ、早く」

フレデリックはマリアから買った花を胸に母親と歩いていく

ミッシー「どこかで会ったような？・・・」

マリオンがパンの入った袋を持って走って来る。

男性が追いかけてくる。

ナタリー来る、マリオンから袋を取り上げて男性に渡す。

ナタリー「ほれ、林檎買っておくれ」

男に林檎を差し出し、渋々小銭をナタリーに渡す。

ナタリーはマリオンに目くばせする(やったねポーズ)

ナタリー「メリークリスマス！・・・ちえ、これっぽっちかい」

マリオン「ナタリー、うまくいったね」

ナタリー「ああ、ほれ」(マリオンに小銭を渡す)

オリヴァ「よう、ナタリー」

ナタリー「調子はどうだい？」

オリヴァ「さっぱりさ」(肩をすくめる)

ナタリー「カジノへお行きよ。あそこは景気がいい(林檎を渡し)

あんた達もほら、行った行った」

ナタリー「林檎を買っておくれよ」

マミー「要らないわ」

マミー、ナタリーの前を通り過ぎようとする。

ナタリー「おや、可愛い赤ん坊だねえ。……クララ……」(指で目尻を

おさえる仕草)

マミー「えっ？クララって……」

ナタリー「さあ、お行き」(涙を見せないように)

マミー「その林檎、この子の頬っぺみたいに赤いわね。一つもらうわ。

メリークリスマス」

マミーは小銭を渡し、林檎をもらって去る

ナタリーはマミーの後ろ姿に向かって言う

ナタリー「メリークリスマス」

一人遠くを見ながら 歌い始める ナタリーと女声コーラス

♪メリークリスマス・ダー  
リング

(BGM) ジャンバラヤ

暗転

(BGM) 続き

(シーン2) 日曜日 夜

ブロードウェイのビリーの店

曲が終わり、客の拍手で明転

イボンヌ「皆さん、ありがとうございます。次の曲はビリーが歌います『クロストウ  
ーユー』」

ビリー「ありがとうございます、イボンヌ。(ピアノとコーラスに合図)」

銃声

歌い終わると、銃声がして突然男たちが入ってくる。悲鳴

B & B 「さあて、次はお待ちかね、ミスター・シカゴの登場です！」

「泣く子も笑う」「バカ、泣く子もチビるだ」「泣かぬなら泣か  
せてみせよう」「もらい泣き」

アル 「おい、お前たち、何の話だ」

B & B 「あ、ボス、縄張りを荒らしに来たと悟られないようにしておき  
ました！」 (得意そうに言う)

アル 「ちえ、まったく・・・ひっこんでろ！」(ドスをきかせて)

B & B 「ひえー」(二人同時に)

デイヴ 「なんの騒ぎだ？」

アル 「これはこれは二枚目デイヴさん、お邪魔かな？」

デイヴ 「はるばるシカゴから、うちの酒を飲みに来たわけじゃないだろう？ アルバート」

アル 「アルで結構。こっちに野暮用があってね、いい店構えなんでふらっと入ってみたってわけさ」(店を見回す)

デイヴ 「ジョジョ、ちょっと」(少し離れて小声で話す)

「ナタリーばあさんを探して伝えてくれ。至急林檎が必要だな。」

ジョジョ 「了解、ボス」(その場を去る)

アル 「どうだい、商売は？」

デイヴ 「このご時世だからな。客を喜ばせるのに必要なものはある」

アル 「ハハハ、お前は運がいいやつだ。」

デイヴ 「フツ・・・」

ビリーがデイヴの近くに来る。あっちに行つてると合図する。

ビリーにB & Bがちよっかいを出し、デイヴの子分（ハンク・リトルジョー・ブッチ・エド）にらみ合う

デイヴ、様子を見ながら冷静に言う。

デイヴ 「アル、あんたも運がいい。上等な酒が手に入ったんだ」

と言って、店員ルビーとクロエに酒の支度の合図をする。

ビリーは頭に来てB & Bの尻を蹴とばす。

怒ったB & Bは銃を抜く。

それを見てデイヴの子分達も銃を抜き、ブッチはアルを狙う。

女性達の悲鳴、デイヴ気にせず静かに言う。

デイヴ 「お前たち、何をやってんだ、客人に失礼だぞ。」

ブッチ 「でも、ボス・・・」

アル 「乱暴はいけねえや、なあ、姉さん。威勢がいいねえ、しかも美人だ。」（と言いながら髪を触り、尻を触ろうとする）

ビリー 「やめて！」（頬を平手打ちする）

銃声

デイヴ 「ビリー！」

B & Bはビリーに銃口を向け、見事に外す。(銃声)

アル 「この馬鹿やろう！」(B & Bの耳を引っ張る)

デイヴ 「ビリーは俺の女房だ。店ん中でもめごとはご免だ。」

(怒りを抑えながら)

アル 「女房！、そうかい、そいつは羨ましいね。いやあ、やっぱりお

前さんは運がいい。(ジロジロとビリーを見ながら)

うちの連中が大変失礼した。(頭を下げる)帰って出直すとする

か。今度来る時は失礼のないよう……。」

デイヴ 「いや、断る。あんたの目的はわかってる。答えはノーだ。いく

ら金を積まれてもな。」

アル 「(ハハハ) あんたの運もここまでかも知れないぞ。」

といて胸に手を入れる。みな緊張で固まる。

ゆっくりと出したのは……人差し指と親指のピストル

アル 「賭けをしないか？」

デイヴ 「・・・？」

アル 「ゲームだ。あんたが勝ったら、俺たちはこの島から手を引く。」

デイヴ 「で、あんたが勝ったら？」

アル 「この店をもらおう。」

ビリー 「何ですって！」

アル 「もちろん、タダでは言わない。」

デイヴ 「チッ」(B & Bが銃を構えていることや、他の子分達が隠れているのを感じている)

「わかった。だが、ちよっと待ってくれ。」(ジョジョがナタリーを連れてくるのを待ったために、その場を離れる)

アル 「なんだ？ビビッてんのか？」

ビリー 「デイヴ、何でそんな賭けにのるのよ。もし負けでもしたら、あたしはどうなるの？冗談じゃないわ！」

デイヴ 「ビリー、ごめんよ、でもオーケーしなきゃ、今、お前を失ってしまうんだよ。ほら、見る。」(と言ってB & Bや周りを見る)

ビリー 「まあ・・・」

デイヴ 「大丈夫だ、ナタリーの林檎さえあれば。ジョジョはどうした？  
ばあさん呼びに行かせたんだが。」

ハンク 「まだ戻って来てないようだ。」

アル 「どうした？いつまで待たせるんだ。」

デイヴ 「まだ？・・・そうか。仕方ない、イチかバチか・・・」

ビリー 「あんた・・・」

アル 「ルールは簡単だ。」

アル 「さっきからうるさい蠅が一匹飛んでいるだろ？先にヤツを殺  
った方が勝ちだ」(と言って銃を出す)

ビリー 「ちよっと、冗談じゃないよ。そんなことで・・・」

デイヴ、ビリーを止めニッコリ笑いうなずく。銃をしまうように  
合図し(要らない)、蠅叩きを2本持つてくるよう店員に合図  
そのうち、1本を手取る。

デイヴ 「俺はこちらに座る。」

蠅の動きを全員音と視線で合わせる。

アルの方に蠅が止まり叩くが失敗する（音と視線でそうする）  
蠅はデイヴの頭の上を通りすぎ、見えなくなる。

ナタリーが上手から入ってくる。ミツシーとマリオンが入る。

デイヴ 「ナタリー、林檎をくれ！」（そうやって林檎を受け取る）

ブルース兄 「や、蠅が戻ってきたぞ！」

ブルース弟 「しかも増えている！」（ベッガーを見て鼻をつまみ、手で蠅を払う）

デイヴはポケットから財布を出し紙幣をナタリーに渡す。

すると蠅はデイヴの前にピタッと止まる（音と視線で表現）

そしてピシヤリと叩く。

ビリー 「殺<sup>やっ</sup>っちまった！」

アル 「こんなに蠅がいては、先ほどの蠅だかわからんぞ。」

デイヴ 「いや、よく見たまえ。俺のテーブルには蠅があと3匹いるが、そちらのテーブルには1匹も止まっていない。」

B & B 「たしかに」(二人で頷きながら)

アル 「なに納得しているんだ！」

ブッチ 「出口はあちらで」

デイヴの子分達が案内し、アル達は歩きかける

デイヴ 「待て。」(といって胸に手を入れる)

アル、身構える、その後ろにB & Bが隠れる

デイヴ 「上等な酒があるって言っただろ」

(胸ポケットから櫛を出して梳かす) || 余裕

テーブルに酒とグラスが置かれる。

アルはこの勝負完全にデイヴの勝ちだと認め、乾杯をする。

テーブルの上にトランプを出し配りゲームを始める。

アル、デイヴ(男声)歌う。歌い終わり、アルが煙草をデイヴに勧める。

## ♪ デスペラード

(BGM) デスペラード

歌い終わり 暗転

## 月曜日（シーン3）夕方

ホテル「カールトン」の裏口

（暗転の間に裏口のドアを置く）

ナタリーは前方にいて、ドアの方へ。そわそわしている

ドアからオスカーが出てくる

ナタリー「オスカー、遅いじゃないか。」

オスカー「慎重にやらなきゃ、こっちの首が飛ぶんでね・・・、

ほら、50セントだ。」（ホテルの便箋と封筒を出す）

ナタリー「50セント？この前は25セントだったじゃないか、元はタダのくせに」

オスカー「前は客室の歯磨きや香水をくすねて女房の土産にもできたんが、今はそう簡単に盗めないのさ。ああ、要らないっていうなら」

（と便箋をしまおうとする）

ナタリー「わかった、わかったよ、ほれ50。」

オスカー「今度はいつ来るんだい？」

ナタリー「いつもの木曜日に。」

オスカー「わかった。盗んだことがバレないように祈っていてくれ。」

ナタリー「やめとくれよ、あんたが首になっちまったら、手紙を受け取れなくなっちまうじゃないか。」

オスカー「そんなに大事な手紙の相手は、さては昔のこれかい？」

(ニヤリとして親指を立てる)

ナタリー「ふっ、まあ、そんなところさ。じゃ、頼んだよ、メリークリスマス！」

暗転

## (シーン4) 月曜日 夜

薄暗いナタリーの部屋 ハンガースタンド、小さな花瓶

クララの写真、ジンの入った瓶、林檎の籠を台に置く

(ジンを一口がぶりと呑み、便箋を置きペンをとる)

ナタリー「さてと・・・」

(手紙を書きながら)

『愛する娘クララ、元気にしてますか？ お母さんはとても元気です(と行って、ジンを呑んでフラっとする)』

今日はニューヨーク市長のガーデンパーティーに招かれました。ニューヨークはビッグアップルって呼ばれているのよ(林檎を手にする)

おまえの義理のパパはスペインに行つて、おまえに会いたいと言っています。』

(写真を見ながら)

「義理のパパとはまだ会っていなかったね・・・あたしもだよ。」<sup>22</sup>

(手紙を書きながら)

『わたしの足では船旅はとても無理なのが残念です。・・・

(クララの手紙を読み返し、嬉しそうにして書く)

おまえが素晴らしい男性と出会えて本当に嬉しいです。おまえがその人を愛するように、彼もおまえを心から愛してください。メリークリスマス。星空を眺めながら、愛を込めて・・・』(と部屋の窓を見る)

ナタリー「あれ、雨が降ってきたよ・・・」

ナタリー 歌 コーラス

歌い終わり 酔っぱらって寝てしまう

♪月曜日と雨の日は

♪ソリティア

暗転

## 火曜日 (シーン5) 夕方 キャバレーオープン前

ビリーの店 客はいない

マリオンが店に入り、デイヴが合図し食べ物を持って来させる

デイヴ 「この前は助かった。ばあさんの林檎のお陰でこの店をとられずに済んだよ」

ナタリー 「おや、そうかい。・・・(フラットとする)」

デイヴ 「おい、大丈夫か？また酒を飲んでいるのか？」

ナタリー 「酒？フツ(笑)もう止めたって言っただろ。」

デイヴ 「ばあさんに何かあったら困るからな。」

ナタリー 「そうかい。ところで・・・なぜあたしの林檎がツキを招くって信じてんだい？」

デイヴ 「・・・、とおい昔のことだが。」

ナタリー 「？」

デイヴ 「あんたがクラブで歌っていた頃、よく聴いていたよ、ほら、ブエナ・ビスタ、あの店の厨房からこっそり入ってさ。」

ナタリー「えっ・・・？」

デイヴ 「俺、親に捨てられて、あの頃よく腹を空かせてさ、客の残った  
食べもんとか・・・（マリオンを見る）、よくあのクラブに出入り<sup>てはい</sup>  
していたんだ。キラキラした服着て歌って、眩しくて女神さまみ  
たいだったよ。あんた。」

ナタリー「フン（悲しそうに笑う）」

デイヴ 「その女神さまが目の前に現れて、『これ、あげるわ』って、フ  
ツ、覚えていないだろうけど・・・」（林檎を手にして）

ナタリー「それって・・・（思い出そうとして）」

デイヴ 「あんた、こう言ったんだ『この林檎はただの林檎じゃない・・・』」

（ナタリーとデイヴ同時に）

『幸運の林檎なんだよ』（二人、笑う）

ナタリー「馬鹿だね、そんな昔に言ったでまかせ、信じているなんて」

デイヴ 「それから不思議に、俺にもツキが回ってきて、此処いらを仕切  
るようになったってわけだ。」

♪ 信じる必要があるんだ

ナタリー「ここらじゃあんたのことを知らないのは産まれたばかりの赤ん坊とよそ者だ。」（食べ終えたマリオンを見る）

デイヴ 「・・・しばらくして、クラブを辞めさせられたって聞いたんだ。

あんたが事故にあって舞台に立てなくなったってね。」

ナタリー「誰がビツコの歌なんか聴きに來るか・・・ってね（悲しく笑う）」

デイヴ 「でも俺は覚えている。あんたが・・・ナタリーが歌っていたあのメロディを・・・」

デイヴと子分（男声）コーラス、とナタリー（女声）歌

ナタリー、涙をこっそり拭く

ナタリー「さて、そろそろ行くよ。」

デイヴ 「おい、酒は止めておけよ！」（金を渡し、林檎を受け取る）

♪ 愛することが必要なの

バック暗くし、前にナタリー 女声（影）コーラス 歌

## 水曜日（シーン6） 夕方 セントラルパーク

ベツガー達がストーブで暖をとっている。ハモニカを吹いたり造花を束ねたりしている。マリアはインディと手話で話す。

そこにオリヴァが袋を背負って、車椅子に乗ってやってくる。

ミッシー「あ、オリヴァが来たよ」

オリヴァ「よお」

みんな「やあ」

ミッシー「オリヴァ、どこ行ってたんだい？」

オリヴァが袋を開けると酒瓶とパンと缶詰などが出てくる。

インディ「こんなにたくさん、どうしたんだい」（パンに手を伸ばし）

オリヴァ「これのお陰よ。」（車椅子をパンパンと叩く）

ミッシー「彼が車椅子のお陰だと言ってる（手話でマリアに）」

ノア「これはホテル・マーベリーの香りだ」（パンの匂いを嗅ぐ）

マリア「見て、これで料理するシチュー（スープ）」（食材を指し）

ミッシー「マリアがフーバーシチューを作るって！」

インディ「で、オリヴァ、まさか盗んだわけじゃないよな？」

オリヴァ「ハハハ、俺たちベツガーは物乞いだ。泥棒じゃない。銭は受け取るが、善良の心を返す。だろ？インディ。」

インディ「えっ？」（話より食べ物に気がいつている）

オリヴァ「人は俺たちに金を恵んで、こう思うのさ（ああ、私の代わりに足を失ってくれてありがとう）てね。」

ノア「そこの方、わしの言いた目めしのかわりに青い空を見ておくれ」  
ミッシー「ノア、今日は曇りだよ。・・・それで？」（オリヴァに）

オリヴァ「セントラルパークの東でドンパチがあつてさ、警官の乗った馬と車がぶつかったって、そりやもう大騒ぎさ。で、俺は医者を呼んだり、交通整理を手伝ったってわけ。」

（車椅子で得意げにクルクル回ってみせる）

ベツガー達は感心しながら、食べ物に手を伸ばしている

インディ「つまり、仕事の報酬ってことだね、いただきます！」

マリオンが来て一緒に食べる

オリヴァ 「マリオン、旨いか？」（自分も食べながら）

マリオン 「うん」（食べ物に夢中）

オリヴァ 「独り占めしなくてよかったよ。」

ノア 「幸せを増やす簡単な方法はそれを分け与えることだ。」

インディ 「ノア、それはナタリーから教えてもらった言葉だよな。」

マリア ≪ナタリーに幸せになってほしい≫（ミツシーの言葉と重ねる）

ミツシー 「ナタリーに幸せになってほしい。うん、ナタリーは幸せを私たちに全部分けてしまったのかな。」

ノア 「人は幸せを求めて生きているのではない。今を生きることが幸せなのだ」

オリヴァ 「あの頃の彼女は、そう、眩しい太陽のようだった・・・」

インディ 「きれいだったよな、はるばるスペインから来て、苦勞して歌手になって、これからという時だったのに・・・」

ミツシー 「ナタリーに憧れてたんだ、あたし。」（と言って頬に手）

♪あの時の歌をもう一度

スーパースター（BGM）

暗転

## 木曜日（シーン7） 昼前

ホテル「カールトン」のロビー

レセプションのカウンター ソファとテーブル、観葉植物

ホテル従業員と客たち

スマイリー「オスカー、明日からもう来なくていい。君は首だ！」

オスカー「それだけは勘弁してください。これには事情があって・・・」

スマイリー「本来なら警察に突き出してやるところだ。残念だよ。」

スマイリーと従業員（男）は背を向け、舞台上は暗くする

オスカーは舞台の端に座ってうなだれる

ナタリーが舞台下からオスカーに声をかける

ナタリー「オスカー、どうしたんだい？そんなところで。」

オスカー「俺はこれからどうしたらいいんだ・・・」

ナタリー 「どうしたらって、早く手紙を出しておくれよ。」

オスカー 「手紙はない。しくじったよ。バレたんだ。」

ナタリー 「何だって！ じゃ、あたしの手紙はどこにあるんだい。」

オスカー 「長年ここで働いて来たっていうのに・・・家に帰って女房に何て言い訳したらいいのか・・・。」

(ナタリー、ホテルに入ろうとする)

オスカー 「あ、ナタリー、だめだ、そっちへ行っては！」

ナタリー、足を引きずりホテルに急いで入る

メアリー 「まあ何なの、物乞いが入ってくるなんて」(警備員に訴える)

ナタリー、レセプションのベルを連打する

ヤマダ 「いらっしやいま・・・(汚いナタリーを見て引く)」

ナタリー 「あたしあての手紙が着いている筈なので、受取りたいんだ。」

ヤマダ 「手紙・・・ですか？(目で支配人のスマイリーを探す)」

ナタリー 「今日こちらにスペインから手紙が着いているはずだが。」

ヤマダ 「失礼ですが、お客様、場所をお間違えではないでしょうか。ここはホテル・カールトンです。」

ナタリー 「間違えるわけないだろ、毎週ここで手紙を受け取ってたんだ。」

大きな声にスマイリーが奥から慌てて出てくる

スマイリー 「お客様、お静かに。（笑いながら）他のお客様のご迷惑になりますので。」

ナタリー 「私は、手紙を返してもらえれば、すぐ帰ります。」

（他の客が自分を見ているので冷静に振舞う）

スマイリー 「手紙とは、お客様宛の手紙ですか？」

ナタリー 「そうよ。さっきもその人に言いました。」

スマイリー 「その手紙が当ホテルに着いていると？」

ナタリー 「そうです。ミセス・ナタリア・ワージントン・マンベル宛の手紙です。」

スマイリー 「そのミセス・ワー・・なんとかマンベルさんと、あなたとはどういう関係で？」

ナタリー 「本人だよ。私宛あたしの手紙だと、さっきから言ってるだろ！」  
スマイリー 「シー、お静かに、落ち着いて」

ナタリー 「ナタリア・ワージントン・マンベルは、この私わたしです。」  
スマイリー 「で、どうしてここに届くと？」

ナタリー 「それは、このホテルに住んで・・・とにかく探しておくれよ、  
わたしが言っていることが嘘じゃないってわかるから。」

スマイリー 「ヤマダくん、持ってきてください。(笑点みたいな呼びかけ)」

ナタリー、スマイリーに感謝し握手する(スマイリー嫌がる)  
ヤマダくん、また出てきて

ヤマダ 「そのお名前の宿泊者はいないので、係の者が返したそうです。」

ナタリー 「返しちまったって！」

ヤマダ 「あ、まだいました」(と言って、ポストマンの方を指さす)

ポストマンがバッグ(袋)を持って、ホテルを出ようとしている

♪プリーズミスターポス

トマン

ナタリーが呼び止めて、音楽スタート

ナタリー 「ちょっと、待って、行かないで〜」

ポストマン（ホテルの従業員）固まる↓逃げる↓袋を取る

手紙をばら撒いて、その中から一通見つける

手紙を舞台に座って読みあげる。

ナタリー 「メリークリスマス、お母さま、お元気そうで嬉しいです。

今日は大事なご報告があります。カルロスからプロポーズ  
されました。」

「まあ」（神さまに感謝の十字をきる）

「真っ先にお伝えしたくてお手紙を書いています、実は  
この手紙が届く頃は、ニューヨークに向かっています。

カルロスとお父さまのロメロ伯爵もお母さまにお会いする  
ため一緒にまいります。お父さまにも早くお会いしたいで  
す・・・」

（BGM）涙の乗車券

しばらく呆然となる。そしてすぐにホテルに引き返す

ホテルのレセプションのベルを連打する

スマイリーとヤマダが、またか・・・という顔で出てくる

ナタリー「お願いします。娘が訪ねて来たら、あたしは、ミセスマンベルは、死んだと伝えてください。先週ミセス・マンベルは死んだと、心臓麻痺であつという間に・・・夫のことを聞かれたら・・・悲嘆にくれて無期限の世界一周の旅に出たと・・・。そう言ってください。あんたらに迷惑はかけないよ、もうここには来ないから、頼むから（泣）・・・」

スマイリーは、警備員に合図し、ナタリーを外に出す

誰もいなくなったロビーにマリオンが入る

ロビーの床に林檎の籠が置き忘れられている

マリオンが籠を持って出ていく

(BGM) マスカレード

暗転

## (シーン8) 木曜日の昼頃

デイヴの部屋 (デイヴ・ピエール・ハンク)

デイヴはスーツの採寸をしている　ハンクは電話で話している

ハンク 「何だって？それじゃだめだ。オグリキャットとシンボリロード

ルフ抜きならこの話は無しだ。厩舎の馬36頭、そう全部だ。  
・・・わかった、いくらだ。・・・なに？10万ドルだ？造幣局か  
ら金を盗んでこいともいいうのか？

・・・わかった。デイヴに伝えて連絡する。」(電話を切る)

ハンク 「アントニーは金に困っているから半分に値切れるぞ。」

デイヴ 「どうだ、このスーツには赤がいいか？それともこっちか？」

ハンク 「どっちもいいさ。それより、馬はどうする。」

ブッチとジョジョが入ってくる

ブッチ 「ボス、見つかりません。どこにもいない。」

ハンク 「何だ、誰のことだ。」

ブッチ 「ナタリーだよ。街中探したが、ベツガー一人見つからない」

デイヴ 「なんだって？ナタリーの林檎が無いなら、取引はしない。」

ハンク 「ジョジョ、どっかで林檎をひとつ箱買って来い」（冗談で）

ジョジョ 「へい」（行こうとするが、デイヴが止める）

ハンク 「ブロードウェイにベツガーが一人もいないなんてことあるか」

ブッチ 「ベツガーどころかネズミー匹見つからねえ・・・」

オリヴァ他ベツガー達が入ってくる。

ハンクがブッチを叩く。ブッチがジョジョを蹴とばす。

デイヴ 「何の用だ」

オリヴァ 「ナタリーのことだ」

ブッチ 「お前がネズミを隠したんだな」

デイヴ 「探していたんだ。ナタリーはどこだ？」

インディ 「それが大変なことになったんだ」

デイヴ 「どうした！病気か？」

ノア 「違う、手紙だ。わしは読んでないが。」

デイヴ 「手紙？何のことだ」

マリア ≪彼女は橋の上から川にアーメン≫

ミッシー「彼女ぶつぶつ独り言を言いながら、ハドソン川に飛び込もうと  
橋の上から・・・」

デイヴ 「死んだのか？」

ミッシー「いや、今は部屋で眠っている」

ノア 「安らかな眠りではない・・・」

デイヴ 「で、手紙がどうしたんだ、何があったんだ。」

ビリー 部屋に入る

オリヴァ 「ナタリーは長年、ホテル・カールトンから便箋をくすねて、  
スペインにいる自分の娘に手紙を送っていたんだ。自分は上流  
階級にいる人間だと偽ってね。」

ミッシー「娘を預けた姉ねえさんが死んで、その後は教会の寄宿舎に。

インデイ「ナタリーは毎月仕送りをしていたんだ。」

ミッシー「そう、だからうちら、ナタリーにシヨバ代を払ってた。」

オリヴァ 「俺たちは影の後見人さ、この俺が「あしながおじさん」になれたんだ」

ノア 「そしてあんたは一番気前のいい後見人だ。」

ミッシー 「母親がお金持ちと再婚してホテル・カールトンの最上階で暮らしている、娘は信じているんだ」

ビリー 「ナタリーに娘がいたなんて・・・」

ミッシー 「(うなづく) その娘さんが伯爵の息子と結婚することになって伯爵も一緒に会いに来るらしいんだ。」(マリアと手話で話す)

マリア ≪金曜日に船が着く≫

ミッシー 「金曜日に船が着くって。」

ビリー 「金曜って、明日！」

デイヴ 「で、なんだ、なんでお前たち俺の所に・・・」

ベッガー達、黙ってデイヴを見る。

ビリー 「ボス、行きましょう」      ベッガー達うなづく。

## (シーン 9) 木曜日の午後1時頃 ナタリーの部屋

ナタリーが突っ伏している。マリオンが心配そうにナタリーの側にいる。ベツガーズとデイヴとビリー、ジヨジヨが入る。

デイヴ 「ナタリー、おい、ナタリー」(ほぼ空の酒瓶をジヨジヨに渡す)

ビリーがテーブルの上のクララの写真を取り、ナタリー起きる

ナタリー 「おや、おまえさん、どうしてここに？ビリーも？」

そんな顔であたしを見て・・・さてはあの世に行けたのか。」

ビリー 「ナタリー、しっかりして。探していたのよ、あなたを。」

デイヴ 「もう酒は飲むな。どんな事情があってもな。」

ビリー 「見て、彼らが話していたナタリーの娘ね。」

(デイヴに写真を見せる)

ナタリー「クララのこと、聞いたんだね。笑えるだろ？この部屋に伯爵様をお招きするんだ。座ってもらう椅子もない、この部屋に。」

(泣き笑い)

ビリー 「きれいな娘さんね。」

ナタリー 「若い頃のあたしに良く似てるよ、嘘じゃないさ。」

(ビリー、ベツガー達を見る。ベツガー達もうなずいている)

ナタリー 「娘とやっと会えるっていうのに、結婚してこれから幸せになる

娘が、母親の、この私あたしのせいで・・・(泣く)・・・伯爵おやこ父子も、

たいそう驚くだろうよ。こんなビツコで林檎売りの婆さんが、

クララの母親だと知ったら・・・(笑う、そして泣く)」

ビリー 手紙を見つけて読んでいる。デイヴに渡し、目を通す。

デイヴ 「とにかく酒はやめろ!・・・(考えて)今日はこれから大事な

取引があるんだ。金はここに置くぞ。」

(少し迷って紙幣を2枚、籠から林檎を2つ取る)

ビリー 「ちょっと待って、可哀そうじゃないの。」

デイヴ 「このボロ屋を宮殿にすることはできないだろ。行くぞ。」

ベツガー達 「待ってくれよ、なんとかならないか」(ロクに言う)

デイヴ 「俺は魔法使いじゃない。」

ビリー 「いい考えがあるわ！」

デイヴ 「えっ？」

ビリー 「ナタリーをホテル・カールトンに住まわせるのよ。」

デイヴ 「馬鹿な、不可能だ。」

ビリー 「どうして？クララ達が帰るまでの間よ。」

デイヴ 「金の問題じゃない。この婆さんを連れていったところで、どうしようというんだ。」

ビリー 「ほら、ロドニーよ、彼に頼めばいいわ。たしかカールトンの最上階に部屋を持っていたわよね、何日か貸してくれて、あなたの言うことなら、何でも聞いてくれる筈よ。」

デイヴ 「あいつの女房が何て言うか・・・、あいつのボスは女房で、俺じゃないんだ。それにこの汚い恰好で・・・」

ビリー 「あとは、何とかするわ。」(ナタリーに近づいてじっと見る)

ビリー 「私に考えがあるの。ナタリー、ついていらっしやい。」

## (シーン 10) 木曜日の午後3時頃

ホテル・カールトンの最上階のロドニーの部屋

支配人スマイリーとロドニーが部屋で話をしている

ロドニー 「というわけで、しばらく女房と別荘に行ってくる。留守の間、友人のミセス・マンベルとご家族が滞在するので、よろしく頼む。」

スマイリー 「かしこまりました。ミセス・マンベル様、はて？どこかで聞いたような・・・？。お気をつけて行ってらっしゃいませ。」

デイヴとビリーとナタリーが入り、スマイリーすれ違いで出ていく。振り向くが、ナタリー何かの陰で見えなくする。

デイヴ 「ロドニー、いやあ、助かったよ、ありがとう。」

ロドニー 「他ならぬビリーの頼みだ。ちょうど女房が暖かい国に旅行したいと言っていたんでね。来月まで留守にするから、好きなか  
け使ってくれ。」

デイヴ 「いや、2・3日でいいんだ。奥さんによろしく。」

ロドニー 「ああ。それに、俺は『シンデレラ』のようなおとぎ話は、嫌  
いじゃあない。」(ナタリーを見て笑いながら部屋を出る)

ハンクとジヨジヨ入室する

ハンク 「何てこった！」(ナタリーを見て)

ビリーはナタリーをシャワールームに連れていく

デイヴ 「取引はどうなった？」

ハンク 「あんたが来ないから、相手はカンカンさ。今度あんたが来な  
かったら、殺すと言われたよ。」

デイヴ 「そうか、金を受け取るまでは殺されまい。」

ハンク 「林檎の運試しは危険だ。そのうち毒林檎に当たって死んでし  
まうぞ。(テーブルの林檎を一つかじる)」

イボンヌが入室する 遅れてナタリーが変身準備で入る

ビリー 「イボンヌ、手配はできてる？」

イボンヌ 「もちろんよ、ああ、ワクワクするわ。皆さん、入って！」

♪ちよっと待ってて

ドラムロール

ピエール、ピンキー、ルツカが入ってくる。制服を着たアシスタント  
カツラやメイク道具、ドレスが入った袋を持っている

ピエール「さあ、皆さん、始めましょう。」（ハイテンションで）

ピンキー「メイク担当のピンキーです。」

ルツカ「ヘア担当のルツカです。」

ロロ・チャコ「お着換え担当のロロです。」「チャコです。」

4人で「ミラクルマジック、スタート」

ホテル従業員は衣装箱を持って入る

タオルで頭を包んだナタリーをつい立て（鏡）の後ろに隠し、

ナタリーを歌とダンスを交えながら淑女に変身させる。

タオル、脱いだ服、靴、下着など脱いだものは出して見せる

ピエール「皆さん、お待たせしました。」（息を切らしながら）

ついたてを外すと、ドレスアップしたナタリーがいる

全員驚き、ナタリーはビリーやデイヴとハグする。

ピエール達は部屋を出る。

イボンヌ 「まあ、なんて素敵。」

ナタリー 「イボンヌ、ありがとう。」

ビリー 「ナタリー、きれいよ、とても。」（感動して）

ナタリー 「ビリー、何てお礼を言ったらいいか・・・」

ナタリー、デイヴの近くに行く

デイヴ 「見違えたよ。」（少し照れた感じで）

ナタリー 「この恩は忘れないわ、神があなたを遣わせてくれた。」

デイヴ 「よせ、俺が天使に見えるか？」

ビリー他、皆がうんうんとうなづく。（見える見える）（笑）

デイヴ 「さて、仕事だ、行くぞ（ハンク達に）」

ビリー 「ちょっと待って。彼女の夫はどうするの？」

ハンク 「夫？」

デイヴ 「そうか、忘れていた。でもビリー、それはさすがに無理だ。これから結婚させようと言うのか？」

ビリー、うなづく

ハンク 「デイヴ、大事な取引だ、さあ早く！」

デイヴ 「自分で探せ。」（ナタリーに言う）

ビリー 「上流階級の夫の役よ。ここまでお膳立てしてあげて、娘にパパはどこ？って聞かれたら、どうするわけ？」

デイヴ、ハンクを見る。ハンク、ノーノーで首を振る。

皆の視線がジヨジヨに。ジヨジヨは逃げ出す。

ナタリー 「あの・・・心当たりが・・・」

ジヨジヨ 「嬉しそうに」どなたで？」

ナタリー 「私たちが信頼できる方が一人います。」

---

ハंक 「私たち？ 俺たちのファミリーのつもりかい。」

ナタリー 「ブレイク判事です。」

デイヴ 「ブレイク判事・・・ヘンリー・ブレイクか！ はまり役だ。

あいつなら上流階級の紳士の物言ものいいができる。しかも、詐欺師だ。」

ハंक 「なるほど！」

デイヴ 「ジョジョ、すぐに呼んで来い。」

暗転



(シーン 11) 木曜日の夕方

安酒場 テーブルと椅子 帽子掛けにカウボーイハット

男たちがヘンリーと男の勝負を囲んで声をあげている

ヘンリーは呆気なく負けて、相手に金を渡す

ジョジョ 「いたいた。ヘンリー、デイヴが呼んでる。すぐ来てくれ。」

ヘンリー 「ちよっと待ってくれ。来月の家賃を稼いどきたいんでね。

(みんなに) もう一度俺と勝負してくれ。」

男たちは、やめとけで、相手にしない。

ヘンリー 「50(セント)賭けよう。勝った奴にこの時計をつける。

100ドルの価値があるぞ。」

一人の男が座り、肘をテーブルに置く。

ヘンリー 「こっちはこの時計、あんたはいくら賭ける？」

マックス 「いくらでも」

ヘンリー 「有り金全部だ」

♪ハーディンググイーチアザー  
(傷つけあう二人)

ヘンリー 「俺が勝ったら全員500ずつだ。いいな」(ニヤリとする)

「レディ、ゴー」でヘンリーと男が腕相撲をする。

男が優勢でもうすぐ勝ちそうだが、それ以上動く気配がない。

ヘンリーは笑いながら歌っている。そして歌い終わると同時にヘンリー勝つ。男は痛そうにする。テーブルの金と皆から金を受け取る。男たち、あっけに取られている。

ヘンリー 「敢闘賞だ(と言って男に時計を渡す)遠慮するな、安物だよ、

アイツんだからな。」(といて向こうの男を指さす。)

指さされた男は時計がないことに気づく。

ジョジョ 「ヘンリー、早くしてくれ、行くぞ」

(BGM)

トップオブザワールド

暗転

## (シーン2) 木曜日の夜

## ホテルの部屋

デイヴ、ハンク、ビリー、ジヨジヨ、そしてヘンリー

ヘンリー「だいたいの話はわかった。それで、何で俺が呼ばれたんだ？」  
デイヴ「ナタリーには再婚相手がいるっていうことになっている。」  
ヘンリー「・・・まさか、俺にその役を？無理だ、それだけは勘弁してくれ。」(と言って、帰ろうとする)

デイヴ「まあ、待て。待ってくれ。」

ビリー「ヘンリー、あなたのような紳士じゃないとだめなのよ。」

ヘンリー「いくら頼まれても、あの林檎売りの夫の役だけはごめんだ。」

いや、ノーだ、いくら俺が詐欺師でも「結婚詐欺」は断る。」

ナタリー静かに入ってくる。ヘンリー、振り返る。

ナタリー「こんばんは。しばらくね、ヘンリー。」

デイヴ「ナタリー、ブレイク判事が喜んで引き受けてくれるそうだ。」<sup>51</sup>

ナタリー「まあ、ヘンリー、感謝するわ。」

ヘンリー「こちらこそ光榮に存じます。高貴なご婦人のお相手を仰せつかるとは・・・」

ヘンリー、ナタリーの手にキスをし、二人は部屋を出る  
皆、それを見送って、ハケたら笑う

暗転

( B G M )

オンリーイエスタデイ

金曜日（シーン13） 波止場 午前 客席が海側 汽笛が鳴る。

ナタリー、ヘンリー、デイヴ、ビリー、ブッチ、ジヨジヨ

ベツガーズ（ノア、ミッシェル、オリヴァー）、マリオン、

ライトマン、船を待つ人々

船が到着する。ナタリー、クララの姿を探す。見つけて手を振る。

ナタリー「クララよ、あそこにいるわ。あ、気がついたみたい。」

ほら、手を振っているわ。クララ（手を大きく振る）

ライトマン「スペインのロメロ伯爵が乗船しているという情報をつかん

だんだが、こんなに人が多くては・・・」

ライトマンの言葉を聞いて、マリオンは後をつける

クララとカルロスと伯爵が波止場へ来る

クララ 「お母さま！」（といてって駆け寄り、ハグ）

ナタリー 「クララ、会いたかったわ、こんなにきれいになって。」

クララ 「お母さまも素敵よ」（ハグ）

ノア 「どうだ、ナタリーはクララに会えたか？」

ミッシー 「うん、ハグしてる。二人とも泣いてるよ」（もらい泣き）

ノア 「そうか。」（ミッシーとハグ）

クララ 「お母さま、ロメロ伯爵とカルロスを紹介するわね。」

クララ 「母です。」

ナタリー 「はじめまして。ようこそいらっしやいました。」

ロメロ 「お目にかかれて光栄です。」（ナタリーの手にキス）

カルロス 「はじめまして。（訛ってゆっくり）」

クララ 「カルロスは、英語があまり得意でないの。」

ナタリー 「エンカンターダ。（はじめまして）」

カルロス「エンカンタード。」

ナタリー「あなたの義理のお父さまのヘンリーよ。」

クララ「(ハグ) まあ、お母さまの手紙のとおり、緑の瞳なのね」

ヘンリー「えっ？」(ナタリーを見る。ナタリー目をそらす。)

クララ「こちらはロメロ伯爵とご子息のカルロスです。」

ヘンリー「ムーチョ・グスト。エンカンタード。」

ロメロ「エンカンタード。スペイン語がお上手なのですな。」

ヘンリー「ウン・ポーコ。ようこそアメリカに。心から歓迎します。」

カルロス「はじめまして。」(握手)

ナタリー「そして・・・」

ビリー「叔母のベリンダです。そして、こちらはデイビット叔父さん。」

クララ「まあ、叔母様と叔父様がいたなんて知らなかったわ！」(ハグ)

クララ「こちらはロメロ伯爵とご子息のカルロス。」

デイヴ「はじめまして。」(ロメロとカルロスと握手する)

マリオン↓オリヴァがデイヴにこっちに来るよう合図する

デイヴ 「ちょっと失礼」

オリヴァ 「さっきから新聞記者がロメロ伯爵を探してチヨロチヨロして  
るぞ。」

デイヴ 「そうか・・・わかった、皆を呼んでくれ」

オリヴァに指示（手振りで）、ブッチとジヨジヨに指示。

新聞記者にベツガー達が物乞いをし、伯爵達に会わないよ  
うにする。

ブッチとジヨジヨは、新聞記者に伯爵らが見えないように、  
車の方（舞台袖）に案内する。

（ B G M ） 涙の乗車券

暗転

## (シーン14) 金曜日 午後2時頃

ホテルの部屋 デイヴ、ハンク

ハンク 「で、どうするんだ？アントニーのやつ、痺れを切らしてるぜ。」

デイヴ 「まあ、待て。今はダメだ。わかるだろ？」

ハンク 「あなたの林檎のために、シンデレラごっこに付き合わされるのはまっぴらごめんだ。馬の手付も払った。ベルモントの厩舎で取引だ。流れたら大損だぞ。」

ビリー、ナタリー、ヘンリー、クララ、カルロス、ロメロ伯爵、

ジョジョが入ってくる。ハンク部屋を出る。(隣へ)

ビリー 「デイビッド、あなたも来れば良かったのに。楽しかったわね、クララ。」

クララ 「ええ。」(カルロスと目を合らしナタリーの手を取る)

ロメロ 「母君は誰からも慕われる気高いお人柄だとわかりました。」

物乞いが皆、母君を見て言うのです。「グッドラック！」と

ヘンリーは咳払いをする。

デイヴ 「ここニューヨークでは、彼女はまさに幸運の女神なのです。  
年中慈善活動をしていて物乞いからも慕われているんですよ。

・・・な？（ビリーに）」（ビリー慌てて頷く）

ロメロ 「素晴らしい！」

ヘンリー 「どうぞでしょう、明日は少し遠くまで足をのばしてみますか。

・・・ベルモント競馬場でレースを楽しんで・・・」

ハンク 「そいつはいい！」（隣の部屋で）

デイヴ 「そいつはダメだ！・・・いや、明日はレースが休みなのです。」

ビリー 「皆さんお疲れよ。今日は休んで明日考えましょう。」

ヘンリー 「そうしましょう。」

ロメロ 「皆さん、ありがとう。アメリカには十日間滞在する予定で、」

ハンク他 「十日間も！」（ビリー、ジョジョ、ヘンリー、ハンク同時に）

デイヴ 「十日間も・・・いてくださるんですね。」

ロメロ 「はい、その予定でしたが、我が国に大変なことが起きたと。

（新聞を皆に見せて、）急いで帰らなければなりません。」

ヘンリー 「それは残念です。(嬉しそうに)」

ロメロ 「ええ。明後日の船で帰国します。」

クララ 「ええ、せっかくお母さまに会えたのに・・・明後日もう帰国だなんて・・・」(涙ぐむ) (カルロスはクララを慰める)

電話のベルが鳴る。ハンク電話を取る

ハンク 「アントニーか。そうだ。待たせて悪かった・・・そう言わないでくれ・・・明後日だ・・・わかった。ではベルモントで。」

電話の音でデイヴ隣の部屋へ。

ハンク電話を切りデイヴに伝える。デイヴすぐ皆の所に戻る。

ロメロ 「貴女の素晴らしい娘クララと、私の息子カルロスの婚約を祝い、帰国して落ち着いたら結婚をさせるつもりです。

どうかお許しをいただきたい。」

ナタリー 「まあ、もちろんです。クララ、良かったわね。(ハグ)

(カルロスに)どうか娘を、よろしく願います・・・」

クララ 「お母さま！」（ハグ）

カルロス 「パードレ、×○□△・・・」（ロメロに提案する）

ロメロ 「それはいい！ 母君にも結婚式に立ち合っていたきたい。」

ナタリー 「まあ！・・・ですが船旅は・・・私にはとても・・・」（杖）

ロメロ 「（うなづいて）そこで、ここニューヨークで結婚式をするとい  
うのはどうでしょうか？内輪だけで、親しいご友人も一緒に。」

ビリー 「まあ、それは素敵！」

デイヴ 「おい！」

ビリー 「クララの花嫁姿を見せてあげたいわ。いいでしょ？」

ヘンリー 「そうだ。乗りかかった船、いや、船に乗る前に、結婚式だ。

ニューヨーク市長も呼んで盛大なパーティーを行おう」

デイヴ 「ヘンリー、そうしたいが、明日だぞ！、何？市長だって？」

ビリー 「市長には急なお話だから・・・（デイヴ頷く）副市長なら来られるかもしれないわ。」

デイヴ、慌てる

ヘンリー「そうだ！知り合いに失業したばかりの神父がいる。彼に頼んでみよう（十字を切る）」

デイヴ「ちょっと失礼。ヘンリー、ビリー、ちょっと来てくれ。

招待客リストが必要なので。ジョジョ、手伝ってくれ。」

部屋にはナタリーとクララ、ロメロ伯爵とカルロス残る

デイヴ、ヘンリー、ビリー、ジョジョは部屋を出る

隣の部屋に入り、ハンクが結婚式の話聞き、驚く

デイヴ「何が市長だ、パーティなんかできるわけないだろ（ヘンリーに）

ビリー、お前まで何を言い出すんだ。」

ヘンリー、ビリー顔を見合わせる

ハンク「こうなったら、・・・」（やめちまおうと言いかけて）

デイヴ「・・・こうなったら、ヤルしかねえ。」（凄みをきかせ）

皆、立ち上がる

土曜日 (シーン15) 午前 ホテル・カールトンのロビー

ライトマン呼び鈴を鳴らす

ライトマン「こちらにスペインのロメロ伯爵がご滞在だと聞いたんだが。

私はデイリーニューヨーク新聞のライトマンです。」

ヤマダ「ロメロ様?・・・少しお待ちください(リストを調べる)

そのようなお方は宿泊されていませんが。」

神父が来る

神父「すみません、アンダーソン神父が到着したと、ブレイク判事に伝えてくれませんか?ミセス・マンベルさんのスイートルームに彼はいます。」

ヤマダ「最上階のお部屋に、そのような方はいらっしゃいませんが。ミセス・マンベル様?どこかで聞いたような・・・」

ヘンリーが来る

ヘンリー「やあ、神父。教会で酒を飲んで追い出されたって?」

神父 「シッ！それは言わないでくれ。仕事だっていうから、すぐに来たんだ。」

ヘンリー「わかったよ。実はスペインのロメロ伯爵の息子と俺の娘が結婚することになったんだ。」

ライトマン「ロメロ伯爵？」（小声で）

神父 「それはめでたいな。お前に娘なんていたのか？」

ヘンリー「俺の娘というか、再婚相手のミセス・マンベルの娘なんだが」

ヤマダ 「ミセス・マンベル……」

ライトマン「ミセス・マンベル……」

神父 「ミセス・マンベル？ ミセス・ブレイクじゃないのか？」

ヘンリー「ああ、話がややこしいんだが、とにかくミセス・ナタリア・ワ  
ージントン・マンベルの娘が伯爵の息子と、今日結婚することにな  
ったんだ。それでお前に神父を頼みたいんだ。」

神父 「今日？」

ライトマン 「今日！」

ヤマダ 「今日？」

（デイヴが来る（新聞記者は、すぐ隠れる）

デイヴ 「ああ、来たか。とにかく部屋に来てくれ。」

（ヘンリーと神父と部屋に行く）

ライトマン 「あれは、たしかギャングのボスの・・・デイヴだ。何か事件の匂いがする。」

(シーン16) 土曜日 昼頃 ニューヨーク警察署

警察署長のトラウトマンが座り、記者のライトマンが話している

ライトマン「・・・というわけなんです。」

警察署長 「たしかにおかしな話だ。二枚目ダイヴが絡からんでいるとはな。

そのメロメ伯爵と何か関係があるのだろうか。」

ライトマン「ロメロ伯爵です。領事館でもロメロ伯爵と連絡が取れないという情報が入っています。ミセス・マンベルというの名前はどこにもな  
り、紳士録で調べましたが、マンベルという名前はどこにもな  
かった。それにホテルの者が言うには、木曜にミセス・マンベ  
ルを名乗る女が来て、ホテルに届いた手紙を奪っていったそ  
うで・・・。」

警察署長「うーん、これは国際問題にもなりかねない事件の可能性がある。  
よし、ダイヴを呼べ。拒むようならばこちらから踏み込むと言え。  
すぐに行け。」 (部下に合図)

暗転

## 土曜日 (シーン17) 昼頃 ビリーの店

デイヴの子分や踊り子たちが、お辞儀や挨拶の練習をしている

イボンヌは女性、ヘンリーとハンクは男性を指導

デイヴとビリーが入ってくる

デイヴ 「どうだ、うまくいっているか？」

ハンク 「見りゃわかるだろ。」

上品とは程遠い皆の歩き方や話し方

ヘンリーがブラックに原稿を渡す。

ブラック 『伯爵、おめえにかかって来いです。』(たどたどしく)

「どういう意味だ？」

ハンク 「ばか野郎！お目にかかれて光栄です、だろ！」

ブラック 「(レッドに)ばか野郎！おめえにかかって来いです。」

レッド 「(ブラックに)ばか野郎だ？俺にかかって来い！」

ブラックとレッドが喧嘩を始める

ビリー 「あんた達は余計なことは言わなくていいわ。『このたびはおめでとうございます。』それだけでいいわよ。」（女性陣に）

ロロ 「ウインクも要らない？」

イボンヌ 「要らない。」

ルル 「こうするのは？（ドレスの裾を少し上げて足を見せる）」

イボンヌ 「お店の客じゃないんだから、ダメよ。淑女のように振舞うの。」

ララ 「熟女のように？」（と言って胸を持ち上げる）

チャコ 「まあ、どうしましょう」（自分の胸を確かめる）

イボンヌ 「こうするのよ。」（淑女のようなお辞儀をした後、お尻を振って

歩く） 女性陣が笑い、男性陣が喜ぶ

ハンク 「みんな、聞け！いいか、お前らはギャングじゃない、上品な紳士だ。ピストルは無しだ。いいか、ポケットに何も入れるな。

わかったら練習だ！ ブッチ、お前の肩書は何だ？」

ブッチ 「マチャチューセツチュー知事」

ハンク 「言えるようにしておけ。お前は？」

リトルジョー「日本大使館大使・・・なんで俺がアジア人なんだ。」

ハンク「平べったい顔だからな。」

レッド「お目にかかれて光栄です。」（原稿を読みながら）

ハンク「よし、いいぞ。」

ブラック「お目にかかれて光栄です。」（レッドに對抗して）

レッド「なに！お目にかかれて光栄だ？」

ブラック「ばか野郎！お目にかかれるかってんだ、俺にかかって来い」

二人は再び喧嘩を始める

デイヴ「よし、みんな聞け！ヘンリーが紳士の手本を見せる。

それを見て真似してみろ。」

ヘンリー「伯爵、お目にかかれて至極しごく光栄に存じます。」

（大袈裟にお辞儀をし、イボンヌの手を取りキスをする。）

「このたびのご成婚、誠におめでとうございます。」

全員拍手をし、練習を始める

ペアになって、向かいあい、お辞儀の練習をする

デイヴ 「みんな、よく聴け。これは遊びじゃねえ、真剣勝負だ。

これが失敗したら、ナタリーはおしまいなんだ。

みんな、ナタリーを自分のお袋だと思って、助けてやってくれ。なあ、お前たち、今まで一つでも良い行いをしたことがあったか？・・・いいか、お前たちは今、神に試されているんだ。人生最高の演技をしろ。わかったか！」

全員 「オー！」（みんな真剣に練習を始める）

ヘンリー 「デイヴはいつからクリスチャンになったんだ？」

ハンク 「さあな。」

電話がかかり、ビリーが電話をとる。

ビリー 「はい、はい、ちょっと待って。（デイヴに）警察から。」

デイヴ 「今、忙しいんだ。何？・・・取り込み中なんだ。逃げも隠れもしないさ。後にしてくれ。」（電話を切る）

オリヴァが店に入ってくる

オリヴァ 「大変だ、サツが店を包囲している！」

デイヴ、ビリーを見る。

外の様子を見て戻り、皆を見てから店を出る。

マリオンが入ってきて、ヘンリーを呼ぶ（こっち、こっち）

ヘンリーは裏（反対方向）から店を出る

ギャングや踊り子たちは動揺してざわざわしている。

サイレン

ハンク

「馬はどうするんだよ！」

パトカーのサイレンが鳴る。

暗転

(シーン17) 土曜日 午後

同日 ビリーの店 シカゴのボス「アル」が来る

アル 「や、これはどういう仮装パーティーだ？」(皆を見て)

ギャングども一斉に銃を構える(持ってないハズが)

ビリー 「何しに来たの？」

アル 「デイクにちよいと用があってね、やつは？」

ハンク 「さあな」

みな上着や帽子を脱ぎ始める

アル 「なんだ、パーティーは終わりか？」

ビリー、何か思いつきアルに近づき話かける

ビリー 「ちよつと頼みがあるんだけど・・・」

アル 「？」 (ハンク、不審な感じでビリーを見る)

ビリー 「警察に行ってくださいさらない？」(ハンクに目くばせする)

アル 「なんだって、警察？」

暗転

(シーン18) 土曜日 午後3時頃

ホテル・カールトンのリビングルーム

結婚式のための台(神父の)がセンターにあり、

花や飲み物などがテーブルに置かれている。

ナタリー・ヘンリー・ジョジョ

ヘンリー「ナタリー、すまない。わたしがパーティをやるうなどと言った

せいで……」

ナタリー「ヘンリー、いいのよ。すべては私の嘘が招いたこと。

ただ、クララが……可哀そうで……(泣く)」

ヘンリー「なあに、神父がいれば結婚式はできるさ。あとは叔父のデイヴとビリーと招待客が一人も来ない理由を考えればいいだけだ。」

ジョジョ「今は家族葬っていうのもあるそうで。」

ヘンリー「この馬鹿！」

クララ入ってくる

クララ 「お母さま、どうしたの。」

ナタリー 「クララ、ごめんなさいね。(涙を拭く) あなたの花嫁姿を見る

ことができるなんて、嬉しくて・・・」

クララ 「まあ、お母さまったら、式はこれからよ。」

ホテルの従業員が入る

従業員 「失礼します。準備が整いました。」

ヘンリー 「では。」

ナタリー 「さあ、あなたもお仕度をしましょう。」

クララとナタリー一緒に部屋を出る

暗転

(シーン19)

土曜日午後5時頃 同・リビングルーム

□メ□伯爵・カルロス・ヘンリー・神父・ホテルの従業員

ロメロ 「そろそろ時間だというのに、誰も来ないですな。」

ヘンリー 「アメリカ人は時間に遅れてくるのがマナーなんですよ。」

ロメロ 「ところで、デイヴさん達の姿が見えないが？」

神父 台のところに立つ

神父 「あの・・・そろそろ宜しいでしょうか。」

ヘンリー 「(何事もないように時計を見て) さあ始めましょう。」

カルロス、こちらへ。」

クララはワンピース姿にウエディングベール、ナタリーと入る

ナタリー、ヘンリーを見る。ヘンリー、首を横に振る

クララはカルロスの隣に立つが、周りを見て、

クララ 「叔父様と叔母様がまだだわ。」

ナタリー 「ごめんなさい。」(ハンカチ)

クララ 「なぜお母さまが謝るの？」

神父 「それでは式を執り行います。」（両手を広げる）

ロメロ 「いや、待ってください。せめて親族が全員集まってからにしようじゃないですか。」（きっぱり言う）

ナタリー、ヘンリー顔を合わせる しばし静寂

神父 「・・・あのう、そろそろ・・・次の仕事があるので・・・」  
ナタリー 「すみません、お話ししなければならぬことがあります。」

ヘンリー 「ナタリー！」

クララ 「どうしたの？お母さま。」

ナタリー 「クララ・・・」（クララの手をとる）

ダイヴとビリーが急いで入ってくる

ダイヴ 「お待たせしてしまいました。申し訳ない。」

ビリー 「まあ、クララとてもきれいよ。」

ヘンリー 「さあ、始めましょう」

神父 「カルロス、貴方はこの者を妻とし、病める時も健やかなる時も、死が二人を分かたつまで、命の続く限り、これを愛し、敬い、貞操を守ることを誓いますか？」

カルロス 「(クララの顔を見る) スイ(はい) 誓います。」

神父 「クララ、貴女はこの者を夫とし、病める時も健やかなる時も、死が二人を分かたつまで、命の続く限り、これを愛し、敬い、貞操を守ることを誓いますか？」

クララ 「はい、誓います！」

神父 「神のお引き合わせにより、今、この二人は夫婦となりました。  
アーメン。」

(カルロスとクララ、ナタリー、みんなでハグする)

ロメロ 「・・・誰も来ませんな。」

そこにベツガーズとマリオンが入ってくる(オシヤレして)

ヤマダが追いかけてくる

ファンファーレ

(BGM)クラシカルな曲

ヤマダ 「こら、入っちゃだめだ！」

ナタリー 「いいのよ、いいんです。．．．みんな、ありがとう。」(涙)  
アル 「ニューヨーク市長ご夫妻の到着です！」

NY市長 「こんばんは、伯爵。お目にかかれて大変光栄です。この度は両家のご成婚まことにおめでとうございます。」(握手)

市長の妻 「おめでとうございます。あなたがクララね、まあ、なんてステキな花嫁さんでしょう。どうぞお幸せに。おめでとうございます。お招きありがとうございます。」

イボンヌ 「市長も一緒に来てくださって、感謝します。」(市長の妻に)  
市長の妻 「他ならぬあなたの頼みですもの。私、感動しちゃったわ。」

アル 「トラウトマン・ニューヨーク警察署長ご夫妻！」

警察署長 「ロメロ伯爵、(敬礼)お目にかかり至極光栄に存じます。」

ニューヨーク警察を代表しまして、心より歓迎し両家のご成婚をお祝い申し上げます。」

署長夫人 「この度は誠におめでとうございます。デイヴさんにはいつもお

世話になっておりますのよ。」

デイヴ 「先日はお招きいただきありがとうございます。」（ニヤリと）

警察署長 「こちらこそ。最高級品を頂戴し（アルを見る）大変感謝してい

ます。」（デイヴに耳打ちする。）（デイヴ驚き）

デイヴ 「おい、あの酒をーダースも渡したのか！」（アルに）

アル 「セントポール教会 婦人部メアリー・アイスハート様」

メアリー 「まあ、こんなところに！」（神父、そしてベツガーズを見て）

神父はここでハケて、ここからはギャングや踊り子の変装した「役」

アル 「ジョン・ロックフェラーご夫妻！」

ジョン 「この度は誠におめでとうございます。（クララに）いつもお母

さんは君の話をしているよ。ご結婚おめでとう。」

ジョン妻 「おめでとうございます。お目にかかれて大変光栄です。

ニューヨークへようこそお越しいただきました。」（ルル）

アル 「英国大使ご令嬢ヘレン・リンジー様」（ルビー）

「マサチューセッツ州知事ウォルシュ様ご夫妻」（ブッチとチャコ）<sup>78</sup>

BGM ころまで

アル 「日本国大使ツルオカ様ご夫妻」(リトルジョーとロロ)

「インド国アーユルベイダ ドクター チャンドラ様」(ブラック)

「ブロードウェイ町内会会長フリードマン様」(レッド)

「クラブレモンハートオーナー、ピエール様」(ピエール)

「クラーク・ゲーブル様」

全員が注目する。(音楽も止まる)

ゲーブル 「このたびはおめでとうございます。・・・」(ハンク)

デイヴ 「さすがにやり過ぎだろ。」(ビリーに言う)

ヤマダ 「ホテル・カールトンよりお祝いの花をお持ちしました」

マリオン、さつと花を受け取りナタリーの方へもっていく

ライトマン、事情がわからないまま皆を見て、

ライトマン 「さあ、皆さん記念写真を撮りましょう」『はい、チーズ』

♪ 始まりは今

ライト光で 暗くなってから歌い出し、だんだん明るくする

クララとカルロスは前方に立つ

歌後半でクララ、カルロス、ロメロは客席の方へ移動

♪始まりは今

汽笛

20

日曜日 (シーン 20)

12月24日 クリスマス・イヴ

船着き場 (ホテル部屋のまま 芝居) 船の汽笛が鳴る。

ハグ、全員手を振り、別れを惜しむ。

再び船の汽笛が鳴る。

ヘンリー 「なあ、君がクララに送った手紙の、再婚相手のことだが。」

ナタリー 「えっ？」

ヘンリー 「俺の目の色と同じで良かったな。緑色の瞳って書いたのは、偶然なのかい？それとも……」

ナタリー 「偶然に決まっているでしょ。再婚したなんて嘘を書いたもんだから、つい。これまで一度も結婚なんかしていないのに。」

ヘンリー 「えっ、じゃ、クララの父親は……(まさか?)」

(船上のクララを目で探す)

転換

波止場のベツガーズとマリオン

オリヴァ 「ああ、一時はどうなることかと思った。」

マリア ≪うまく騙せて本当に良かった。≫

ミッシー 「うん、ナタリーは、本物の貴婦人のようだったね。」

ノア 「この奇跡は神の力か？それとも林檎の魔法なのか？」

インディ 「なんだか誇らしい気分だったよ。」

ミッシー 「この貴婦人は、本当は私たちの仲間ですってね。」

マリオン 「ねえ、ほら見て、クララがこっちに来るよ」

クララ ≪今、あなた達が話していたことは、本当のことですか？≫

ミッシー 「あんた、手話がわかるのかい？」（ビックリして）

クララ 「ええ。（うなづく）」 ベツガー達驚く。

ミッシー 「ば、馬鹿だね、冗談に決まっているじゃないか。」（慌てて）

クララ、ナタリーの方向に行くが、思いとどまる。

クララ 「お母さん、ありがとうございます。私、幸せになります。」

クララ船に乗る 転換

デイヴ、ハンク

デイヴ 「待たせたな。さあ、行こう。」

ハンク 「行くなって、どこに？」

デイヴ 「ベルモント競馬場さ、取引には間に合うだろ？」

ハンク 「ああ、あの話は無くなった。」

デイヴ 「なんだって？」

ハンク 「奴への礼に、ビリーの店をくれちまう方が良かったか？」

馬のいななき音

ハンクがアルの方を指す（馬のいななき） アルが登場

アル 「（林檎を手にし）俺にも分けてもらったぜ、幸運の林檎ってやつをな。」

ナタリー、ベッガー達

「メリークリスマス！」

終わり